

<前回：宗教哲学と現代2—解放系>

(1) 現代神学を規定する二つの問題系

「現代キリスト教思想は多岐にわたっており一見混沌とした様相を呈しているものの、この動向（特に1980年代以降）を詳細に分析するとき、次の二つの中心問題を確認することができる。

1. キリスト教と科学技術（自然科学が担う近代的合理性と技術的革新）との関わり
2. 多元的社会におけるキリスト教の課題・意義（公正・正義に対するキリスト教の寄与）

・・・

現代の科学技術の問題が社会的正義の問いと無関係であり得ないことは、環境と経済が分離不可能な問題群を構成していることから、明らかである。

(2) 解放の神学の概要

1. 「解放の神学」系という問題群の核をなす「解放の神学」の概観。

・発端：ラテンアメリカにおいて「解放の神学」という名称をもって登場した実践的神学運動。第二ヴァチカン公会議（1962～65年）とも連動した神学動向——グティエレス（『解放の神学』岩波書店）、ソプリノ、ポブラが名前を連ねる——。

少なくとも、1950年代後半のラテンアメリカ司教会議（リオデジャネイロ、1955年）やキリスト教基礎的共同体運動（1957年頃から）に遡る。問題は、政治的経済的な抑圧、格差、貧困であった。当時のラテンアメリカを規定していたのは、軍事独裁と大土地所有を特徴とする強権的な政治経済体制であり、その背後にはアメリカ合衆国を中心とする列強の意向が存在した。

・金子啓一が『岩波キリスト教辞典』の「解放の神学」の項目。こうした歴史的状況の中で「被抑圧状況におかれてきた民衆の解放を求める運動が高まり、その運動にキリスト者も参与」という仕方で生まれた神学潮流が、解放の神学だったのである。もちろん、キリスト教には、「被抑圧状況におかれてきた民衆の解放を求める運動」に共鳴しそれを推進する動きが最初期から存在していた（イエスの宗教運動やパウロのエクレスシア創設）。

・1960年代に始まったラテンアメリカの解放の神学は、その後、1980年代にかけて、抑圧からの解放を希求するさまざまな問題領域へと世界各地で急速に広がって行く。

(3) 「解放の神学」系とは何か

2. 金子啓一は、「解放の神学」の辞書項目の中で、韓国の民衆神学、黒人神学、フェミニスト神学を合わせて扱っている。

・解放の神学の諸潮流は、特に1990年代になると停滞期に突入。停滞の原因はさまざまであるが——民衆神学の場合は、軍事独裁から民主国家への移行によっていわば目標を見失ったことがしばしばその原因に挙げられる——、先進国を中心とした政治の保守化、ソビエト連邦崩壊に象徴される共産主義の明確な後退、経済における新自由主義の台頭など。社会や文化の変革による「解放」をめざした運動体の活力を奪い、解放の神学の諸潮流に停滞をもたらした。

・この状況が再度転換するのは、21世紀に入ってから、2010年頃のこと。

3. 20世紀後半の解放の神学の前史として19世紀のキリスト教社会主義あるいは20世紀前半にかけての宗教社会主義を位置づけることができる。解放の神学は突然始まったものではない。

・19世紀以降の西欧の近代社会において、キリスト教的救いのメッセージはしだいに個人主義化し、個人の内面の事柄に集中する傾向を示すようになる。この動向は、本来の「救済／解放」(Salvation/Liberation)が内面の「救済」と社会的な「解放」へと分極化することとなって現れる。

・1960年代以降、特に目立つようになったさまざまな属格の神学——希望の神学、平和

の神学、人権の神学、日本の神学・・・——を連想する人もいると思われるが、その理解はやや一面的。解放の神学は、人間の「解放＝救済」の問いというキリスト教神学の本来的事柄に関わる問題提起なのであって、決して、時流に乗った流行神学ではない。

・「解放＝救済」への問いによって結ばれた、黒人神学、フェミニスト神学、民衆神学などをも包括した広範な神学動向を、「解放の神学」系と表現する。「解放の神学」系は現代神学の主要な潮流の一つ。

4. 現代の「解放の神学」系と、キリスト教史の中にさまざまな形態で確認できる「解放」の神学との違い。

5. 抑圧構造を批判的に解明する手段として社会科学的分析。

人間の解放がそこで問題となる現実世界は、伝統的に罪と規定されてきたが、近代以降、それは抑圧構造（エーリッヒ・フロムやティリッヒらに倣うならば、「破壊の構造」）としてその複雑化の度合いを著しく高めている。

・解放の神学におけるマルクス主義問題となって問われたこと。この問題は、「解放の神学はキリスト教的見せかけをもったマルクス主義に過ぎない」という広範に広がった思い込みとなって現れている（Christopher Rowland (ed.), *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Second Edition, Cambridge University Press, 2007, p.xiii）。

・「解放の神学」系にとって社会科学的分析は必要不可欠であり、マルクス主義がそのために用いられることがあった。しかし、それとイデオロギーとしてのマルクス主義の受容とはまったくの別の事柄。

6. グティエレッツは、『解放の神学』（岩波書店）において、神学の役割を「神のことに照らされた、キリスト教的実践に対する批判的考察」とし、発展主義（開発主義）から社会革命（解放）への転換を主張しているが、その中で、マルクス主義について次のように言及している。

「現代神学が、自らの思想の源泉を探って、この世の変革と歴史の中での人間行動の意義を考えはじめたことについては、マルクス主義に負うところが大きいのである。さらに、神学は、その独自の考察によって世界の変革に意義を与え、それを把握すると同時に、信仰理解の試みによって歴史における人間の歴史的实践の意義を汲みとり、それを把握する。このとき、マルクス主義との対峙が役に立つのである。」

（4）解放の神学の挑戦は続く、そして日本

6. 1990年代を中心に停滞期。『解放の神学の再興』（2013年）の編集者チア・クーパーは、この論集の序論において、次のように述べている。

「1997年に解放の神学を研究しようとしたとき、アメリカ合衆国におけるわたしの知人たちの圧倒的な反応は、『なぜそれを研究したいのか？ 解放の神学は終わっている』というものであった。」

7. ベルリンの壁の崩壊に象徴される共産主義の退潮と民主主義的資本主義（特に新自由主義）の勝利、そして何よりもキリスト教界の保守化が、解放の神学に冬の時代をもたらした。

・しかし、クーパーが指摘するように、「ベルリンの壁の崩壊によって抑圧がなくなったわけではない。解放運動家はなおも抑圧と戦っている」。そして、「解放の神学は、ゆっくりではあるが、アメリカとヨーロッパの学問世界に戻りつつあるのだ」。

・「解放の神学」系はより強力で多様な隊列を組み直して再登場しつつあるのである。

8. 問題は日本である。

「日本のキリスト教は、第一世界による第三世界の搾取の恒常化ではなく、グローバルなコンテキストの中で共同体として共生するにはどうしたらいいのか、そのことを倫理的にも実践的にも究める解放的な課題を負っている。ポストコロニアルな視点からすれば、ポストモダニズムの問題は、その公開性や局所性の高揚をいかにして現代世界の道徳的な正

義の課題にも応えられるように組み替えられるか、ということである。ポストコロニアルの批判に耳を傾け、アジアの植民地主義下の民衆と連帯することこそ、日本のポストモダンニズムの方向をいっそう豊かなものにし、特権的第一世界の仲間内の消費をめぐる贅沢な議論に留まらない、解放に向けた一歩を実践的に推し出す契機になるのではないだろうか。」(栗林輝夫『栗林輝夫セレクション2 アメリカ現代神学の航海図』新教出版社、2018年、222-223頁)

9. 日本における「解放の神学」の可能性。

- ・日本における「解放の神学」についても、これまでそれなりの議論の蓄積が存在する。ルーベン・アビトと山田経三(グティエレッツ『解放の神学』岩波書店、の共訳者である)との共著『解放の神学と日本——宗教と政治の交差点から』(明石書房、1985年)において、『解放の神学』、『民衆の神学』のような動きに触発されて、日本の(プロテスタント・カトリックを含む)キリスト教共同体が、20世紀末の世界の中の日本というこの具体的な歴史的状況において、今後いかなる役割を果たすか」という問いが立てられている。
- ・栗林輝夫『荊冠の神学——被差別部落解放とキリスト教』。

先駆者として田中正造や賀川豊彦を挙げる(栗林輝夫「原発と田中正造の環境/技術の神学——人間は自然の「奉公人」」、『関西学院大学キリスト教と文化研究』2015年)。

- ・豊かな先進国と総中流意識を満喫していた1990年代の日本において「解放の神学」はまさに冬の時代の只中にあり、この状況は現在も大きく変化したとは言えない。しかし、多元性と絡み合った軋轢と進展しつつある格差とは日本の現状が「解放の神学」系と決して無関係ではないことを示している。

10. ラテンアメリカの解放の神学のいわば母体・実践の場となった「基礎共同体」(Basic community)を参照。

- ・スリランカ出身でアジアの解放の神学を提唱するアロイシウス・ピエリス。「基礎共同体」に繰り返し言及(Aloysius Pieris, *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988)。
- ・ピエリスは、アジアの解放の神学の担い手となるべき「地域教会」(the local church in Asia)が「基礎共同体」の中で育まれると述べている。

11. 「基礎共同体」の教育的機能。

1960年代のラテンアメリカの解放の神学は、それと連携して進展していた「解放の教育学」と密接な関わりにあった。パウロ・フレイレ。

- ・識字教育とそれを通じた「意識化」——被抑圧者＝民衆が対話的な仕方と言葉の意味を学んでゆき、それによって現実的状況を批判的に認識することが可能になる、そしてそれは現実の変革へ展開する——は、「基礎共同体」が何よりも教育的機能を果たす場であることを示唆している。

- ・日本における基礎共同体の可能性。地域に根ざした学校の存在。

現在の学校は教師があまりにも多忙であり、PTA問題が示唆するように、学校と家庭と地域は連携機能を失いつつあると言うべきかもしれない。しかし、かつてそこには確かに緊密な連携が存在していたのであり、現在もそれを受け継ぎ守る努力が途絶えたわけではない。それに、キリスト教を有機的に接続できるとすれば、そこに日本における基礎共同体は成立するかもしれない。

- ・現在の日本で、キリスト教と地域・社会福祉とを結びつける試みはすでに始まっている。これに教育を結びつけること、ここに日本における解放の神学の可能性が存在するように思われる。

・明治以降のキリスト教が日本で具体化した貴重な遺産が、教育と社会福祉の中に見いだされることを、わたしたちは思い起こすべきである。賀川豊彦が、幼児教育と組合運動に力を注いだ意味も、ここから再評価できるはずである。

13. 宗教哲学と現代 3 — 宗教的多元性

(1) 宗教の神学

1. 宗教的多元性（複数性）と宗教多元主義：古い問題と新しい問題
グローバル化と多元化
2. 近代的問題状況：人間の営みとしての宗教とその多様性、その中におけるキリスト教。
3. 宗教的多元性と教派的多元性 → エキュメニズム
4. 現実：対立・相克（戦争）、民族・経済・政治の状況下での宗教
5. 多様性を整理しキリスト教をそこに位置づける議論
 - ・啓示論、救済論、歴史神学 → 土着化論
 - ・宗教類型論から価値判断へ：排他主義、包括主義、多元主義
6. 諸テーマ（問題群）：戦争と平和（戦争論・平和論）、宗教間対話（対話論）、寛容（宗教的寛容論・信教の自由・政教分離）

↓

宗教的多元性をめぐっては、大きな問題群が形成されており、1970年代以降のキリスト教思想の主要動向の一つとなっている。

「近代とポスト近代」という枠組みの内、位置づけることができる。

連載「現代神学の冒険——新しい海図を求めて」（『福音と世界』新教出版社）

- ・「第3回 ポスト近代とは何か」（『福音と世界』2016.12、pp.58-63）。
- ・「第16回 インタビュード（3）——「宗教の神学」の行方」（『福音と世界』2018.1、pp.54-59）。
- ・「第17回 インタビュード（4）——戦争と平和」（『福音と世界』2018.2、pp.54-59）。
- ・「第18回 インタビュード（5）——宗教的寛容と不寛容なリスク世界」（『福音と世界』2018.3、pp.54-59）。

(2) 近代という時代区分を考える

7. いつから近代化、また近代はどのような段階を経て展開してきたか。古代／中世／近代といった時代区分は便利であるが、それ自体がルネサンス期の産物、決して問題がないわけではない。宗教（キリスト教）との関連から見て、近代・モダンに、17世紀中葉以前と以降での段階を設定し、また、19世紀の末以前と以降とを区分する。

8. J・ル＝ゴフ『中世とは何か』藤原書店。

「歴史家として、私は過去が作り上げた時代区分を受け継いでいるのですが、それでもこういう時間の人為的な切り分けかたはときにものごとの正しい認識を損なうこともあるわけで、疑ってみる必要があります。」(70)

「歴史は連続した流れ」(71)

「「中世 *Moyen Age*」という言葉ならびに概念は、十四世紀ペトラルカをはじめとするイタリア人文学者たちにおいて現れます。」(73)、「ペトラルカのうちには、ただちにある中世的精神が認められます。多くの人文主義者たちと同様、彼は古代をその純粹状態のうちに見出そうとします。」(74)

「中間の時」「一方は古代に対して、もう一方は未来に対してです。」「中世から十七世紀まで、古代の重要性は、キリスト、使徒たち、それに教父たちによって与えられていました。古代とはキリスト教の基礎が置かれた時代です。」(75-76)

「未来」「ある「再生」」「古代の回帰ではありません。それどころか来たるべき古代、古代に似ていながら古代の単なるくりかえしではないある時の到来として、それは人々を魅了するのです。キリスト教はこのときついに、初めてその完成を見ることになるでしょう。」(76)

「十八世紀以降」「古代のさん然と輝く過去と啓蒙思想たちの光に満ちた未来との間にはさ

まれた、暗黒の時代なのです。」「やがて歴史と進歩は同一のものと見なされるようになります。これが十九世紀の目指すところであり、ここに歴史には、より良いもの、正しいものに向かう一つの方向性が与えられるのです。」(78)

「近代の(モデルヌ)」「十七世紀から十八世紀にかけての古典派・近代派論争においてすでに垣間見られていた新たな意味が与えられます。「近代的」であるということ、それはもはや単に現行の時代に属するというのではなく、より良く、十全で、進歩の先頭に立っているという意味なのです。」(81)

「一連の変化が、一気に、すべての分野で、ただひとつの場所で起こるなどということはありえないのです。私が長い中世という言いかたをするのはそのためです。・・・経済においても同様で、市場というものが成り立つのは十八世紀の終わりのことでしかありません。農村経済が飢餓を消滅させることができたのは、ようやく十九世紀になってからのことです(ただしロシアは例外です)。政治や経済の語彙の決定的な変化」「を見るには、フランス革命や産業革命を待たなければなりません。」(90)

9. 注意点

- ・ 地域的多様性
- ・ サブシステム(科学・啓蒙的な実証主義的科学/資本主義・市場経済/民主主義・議会制、立憲制、信教の自由と政教分離)における近代化のズレ。

(3) 近代の基本構造と制度的再帰性

10. モダニティの基本性格としての制度的再帰性(ギデンズ)。
11. 人間存在(精神、自己)の基本構造としての再帰性一般とモダニティの特徴としての制度的再帰性との相違。
12. キルケゴール『死に至る病』(斎藤信治訳、岩波文庫)、人間とは何か?

「人間とは精神である。精神とは何であるか? 精神とは自己である。自己とは何であるか? 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、——それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。」(20頁)。

「死に至る病とは絶望のことである」(第一編)、「絶望は罪である」(第二編)
13. 宗教との関わりで問題な制度的再帰性の特徴
 - ・ 懐疑の制度化(確実な知の解体)
 - ・ 内部準拠性によるシステムへの繰り込みとシステムの自己修正

↓

社会システムの外部の問いの削除、伝統や権威の解体
14. 19世紀の宗教批判→信仰はイデオロギー(アヘン)かユートピア(幼児性)かの二者択一にさらされる。
15. 再帰的システムにおいて残される問い: いわゆる限界状況、戦争や革命、そして死といった、システム外部の問い。システム時代の存立の問い。
 - システムの根拠づけ・正当化の問いにさらされるという危険(可能性)を除去することはできない。コントロールできないリスクの存在。
 - モダニティにおける抑圧されたものの回帰、宗教は衰退しない。
16. 安心・予測(未来の植民地化)を目ざしてきた再帰的なコントロール自体が、大きな不安定要因となる。それが生み出す不安な世界という予想外の事態。

サブプライムローン問題と金融資本主義の残したもの
17. 伝統的宗教は、この不安に対する安心、実存的な確信をなおも与えるのか。

伝統的宗教は、根本的な懐疑にさらされているとすれば。

伝統的宗教の変革か、新しい形態の宗教の生成か。

18. ポスト世俗時代の宗教、宗教回帰

「二一世紀初頭に見られた宗教の回帰現象は、一九七〇年代にいたるまで二〇〇年以上にわたって続いてきた社会通念 *conventional wisdom* を破るものだった。それまでは一般にこんなふうを考えられてきた。啓蒙主義は人間を神から解放し、あらゆる分野で人間が自律化するのを手助けしてきた。」(ベック、31-32)

「世俗化のパラドックス」「世俗化は宗教から力を奪うと同時に、宗教に力を与える。」(39)

「世俗化」「次第に個人化へと向かう宗教性の形成とその大規模な拡大」(43)

「宗教の「回帰現象」」「一元的な世俗化に代わって、人々の日常生活のみならず、社会と政治のすべての領域においても、宗教の多元化が生じたことだ。」(45)

「争点」(藤原聖子)

- ・「結局、宗教は衰退したのか、していないのか？」(13-20)

英米宗教社会学の世俗化論争、世俗化論の広がり、

- ・「イスラームはテロを生む宗教なのか？」(23-30)

イスラームの「政治化」という形での宗教復興はなぜ起こっているのか？、テロの原因は何なのか？

- ・「オルタナティヴか、体制順応か？」(137-144)

スピリチュアル文化は良いものなのか？ いかがわしいものなのか？、体制批判か？ 順応か？、なぜ女性が多いのか？

- ・「グローバル化は宗教の多様化か、一元化か？」(219-226)

一九九〇年代から大きな変化は起きているのか？、多様な宗教との出会いは、心を開くのか、閉ざすのか？

(4) 研究課題

- ・モダニティが伝統的な宗教にいかなる変化をもたらしたか。

「モダニティのもとにおける宗教性」の現象学

- ・伝統宗教にとってモダニティはどのように評価できるのか。いかにモダニティに対処すべきか(三つの可能性。完成、超克、回避)。モダニティが抑圧する道徳的実存的な問いに対して答える。

キリスト教と近代システムの二重性

- ・モダニティはいかなる宗教的な可能性を秘めているのか。

現代のスピリチュアリティをめぐる問題

- ・モダニティ自体が再帰性という構造を有していることから、そこにも一つの宗教性(広義の宗教、再帰的な社会システムの脱パラドックス化・根拠付けとしての宗教)を見いだすことができる(制度的再帰性も再帰性であるからには)。

- ・対立を克服する道はどこに見出されるか。

<参考文献>

1. 宗教の神学

- ・古屋安雄『宗教の神学——その形成と課題』ヨルダン社、1985年。
- ・ヒック、ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて——宗教的多元主義の神学』春秋社。
- ・G・デコスタ『キリスト教は宗教をどう考えるか——ポスト多元主義の宗教と神学』教文館。

2. John Hick

- ・*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963(1990). (『宗教の哲学』勁草書房。)
- ・*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

- ・ *Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.
- ・ *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave Macmillan, 2006. (『人はいかにして神に出会うか 宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。)
- 3. ジョン・ヒック『ジョン・ヒック自伝 宗教多元主義の実践と創造』トランスビュー、2006年。
- 4. 間瀬啓允『現代の宗教哲学』勁草書房、1993年。
- 5. 間瀬啓允・稲垣久和編『宗教多元主義の探究—ジョン・ヒック考—』大明堂、1995年。
- 6. 間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008年。
- 7. アンソニー・ギデンズ
『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社。
- 8. リクール『イデオロギーとユートピア』新曜社。
『解釈の革新』(久米博他訳)白水社。
- 9. 芦名定道 「近代/ポスト近代とキリスト教——グローバル化と多元化」
『キリスト教と近代化の諸相』(「近代/ポスト近代とキリスト教」研究会、研究報告論集)創刊号、2008年3月、pp.3-18 現代キリスト教思想研究会。
- 10. 島菌進/磯前順一編『宗教と公共空間——見直される宗教の役割』東京大学出版会。
- 11. 櫻井義秀、稲場圭信編『社会貢献する宗教』世界思想社。
- 12. ウルリッヒ・ベック『〈私〉だけの神——平和と暴力のはざまにある宗教』岩波書店。
- 13. 藤原聖子責任編集『いま宗教に向きあう3 世俗化後のグローバル宗教事情』岩波書店。